

組織目標評価報告書（平成30年度）

部局名：

異分野基礎科学研究所

部局長名：

久保園 芳博

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	
①-1 目標	①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>平成30年4月に発足する「学際基礎科学専攻」における大学院教育体制の確立が最大の課題である。大学院自然科学研究科と協力して、博士後期課程の定員充足を図るために、国内外から積極的な学生の誘致を図るとともに(留学生数の増加とともに、国内から優秀な学生を集める)、学際的な教育・研究により、博士後期課程学生の多様なキャリアパス形成につながる大学院博士後期課程の実現を図る。国際的な視点から、欧米、アジア各地の大学院生を留学生として受け入れるばかりでなく、インターンシップとして、大学院生の交換プログラムも積極的に推し進め、国際的な枠組みの中で大学院教育を実施する体制を構築する。また、大学院博士後期課程の学生の研究指導ならびに教育に、積極的に外国人研究者が関与する体制を構築し、国際標準のもとでの「研究を志向した大学院教育」を実践する。これらを通じて、学際基礎科学専攻が真に岡山大学における「博士後期課程」教育の模範となるようにする。</p>	<p>平成30年度に発足した「学際基礎科学専攻」の定員10名を10月入学で完全充足し、大学院自然科学研究科博士後期課程全体での博士後期課程入学ならびに進学学生の増加に大きく貢献した。とくに、アジア地域からの優秀な留学生の確保に努め、優秀な学生を学際基礎科学専攻に入学させることができた。また、学際基礎科学専攻の大学院生に対しては、独自カリキュラムとして、基本科目(科学における哲学と倫理、アドバンスト学際基礎科学プレゼンテーション、学際基礎科学国際セミナー、先端研究インターンシップ)を必修として位置づけて、国際的な視野と高い倫理性を身につけた博士後期学生の育成に努めている。これは、岡山大学の大学院教育の模範となりうるものである。また、学際基礎科学専攻では、学生の専門性を広げ、真に学際的な見地から研究を俯瞰的に見渡せる能力を有する学生を育成するために、自分の専門の枠にとどまらず、他の研究分野の講義を積極的に受講することを呼び掛けており、それが実践されている。さらに、欧米各地のトップクラスの大学(パリ大学など)から、インターンシップ学生(博士前期課程レベルが中心)を受け入れており、海外の大学から「日本におけるインターンシップを有効に行うことが可能な研究所」としての認識が広まっている。平成30年度(平成30年12月段階)で海外から1月以上受け入れた大学院生数は15名である。</p>
①-2 年度計画との関連	①-2 大学全体への貢献
<p>・30年度計画にあるように、国内外の優秀な大学院生が、安定な生活環境の下で、積極的に研究活動ができるように、学際基礎科学専攻で学ぶ大学院生を異分野基礎科学研究所のリサーチアシスタントとして研究補助業務に雇用する。 ・大学院生の中の優秀な学生には研究補助金支援を行って、ユニークな研究の芽を組織的に伸ばすようにする。 ・海外への学生の積極的な派遣ならびに、海外からの学生の受け入れを通じた、国際的な環境の中での大学院教育を実施する。</p>	<p>学際基礎科学専攻の定員(10名)を充足することによって、自然科学研究科全体の博士後期課程への進学・入学者数の増加に大きく貢献した。また、欧米各地からインターンシップ学生を幅広く受け入れることによって、岡山大学が、欧米のトップクラス大学の大学院生の「日本における有力なインターンシップ先」として認識されつつある。また、博士前期課程レベルにおいても、研究所の研究活動が広報されることによって、中国のトップクラスの大学の学部学生が、博士前期課程に入学することを念頭に来学するなどの事例が起こっており(西安交通大と蘭州大)、岡山大学が「日本のトップクラスの研究大学である」との認識が広がりにつつある。</p>
①-3 目標とする(重要視する)客観的指標	①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
<p>・学際基礎科学専攻(博士後期課程：定員10名)の定員の完全充足。 ・海外からのインターンシップ学生の受け入れ数。 ・学際基礎科学専攻ならびに異分野基礎科学研究所所属教員の指導する学生の海外での滞在研究の実施数。 ・異分野基礎科学研究所所属教員の指導する博士前期課程、博士後期課程(学際基礎科学専攻)学生の増加。 ・異分野基礎科学研究所所属教員の指導する博士前期課程、博士後期課程(学際基礎科学専攻)学生の論文発表数ならびに海外学会での発表件数の増加。 ・博士後期課程修了者の就職状況。</p>	<p>・学際基礎科学専攻の定員(10名)を完全に充足することができた。定員充足のために、アジア各地で異分野基礎科学研究所の教員が、研究所と学際基礎科学専攻の説明を行って、入学希望者を募ってきた。また、学際基礎科学専攻の案内パンフレットも作成している。また、入学・進学予定者の選抜については直接面接を行うことを基本としており(一部スカイプ等を利用)、学力の適切な判断と、研究に対する熱意等を詳細に調べている。平成31年度についても、平成31年3月段階で学際基礎科学専攻に、定員を超える入学・進学希望者がおり、昨年度に比べて着実に応募者数が増加している。したがって、平成31年度の定員確保については問題がない。また、定員確保を行うために、「学生定員確保に関する担当教員」を1名決めて、毎月行われる教授会ならびに研究所内メールで、現在の入学・進学希望者数が全教員に周知されるようになっている。</p>
②研究領域	
②-1 目標	②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>異分野基礎科学研究所の設置理念は、「基礎科学研究の深化発展と、異分野融合的研究展開による新しい学問分野の創出、さらには国際的な視点での研究活動の積極的推進」であり、これを通じて岡山大学を世界的な研究大学へと飛躍させることをミッションとしている。具体的な目標を以下に記載する。 ・世界的に認められる研究業績をあげるために、現在世界をリードしている光合成研究の積極的な支援を図る。さらに、世界トップクラスの研究をあげている超伝導、エレクトロニクス、エネルギー貯蔵物質の理論化学研究の更なる引き上げを図る。また、世界オンリーワン研究を行っているニュートリノ研究ならびに数理科学研究を、異分野基礎科学研究所として組織的に支援する。すなわち、人的資源の積極的配置、予算の集中、大学院博士後期課程学生の支援などを進める。 ・トップ1%となる論文数の引き上げと、Nature, Scienceならびにそれに準ずるクラスの雑誌への掲載、被引用回数の増加(5000を目安にした被引用回数の増加)を図る。このため、トップクラスの雑誌への掲載料の支援を行い、若手研究者に積極的にトップクラスの雑誌に投稿することを呼びかける。また、世界的な研究業績については、研究所として積極的な広報活動を行うとともに、各研究分野での受賞者数の増加に取り組む。 ・異分野基礎科学研究所として、研究所内の各研究グループの研究活動状況を積極的に把握し、新たな研究展開の芽が開こうとしている分野や、世界的な研究業績が出ている分野に人的資源の集中ならびに予算の集中分配を行うなど、傾斜配分方式を実施する。各グループが必要としている装置、修理の必要な装置等を把握してその支援を組織的に行う。また、新しい研究の芽をばくむむために、大学院博士後期課程ならびに前期課程学生の中で優秀な研究を行う者や、新しい興味深い発想で研究を行う者に研究支援金を提供するとともに、顕彰を行う。これは、若手研究者や研究所内のグループに対しても同様とする。 ・世界トップクラスの外国人教員の採用によって設置した研究グループの支援を進め、外国人研究者が研究活動を行いやすい環境を整える。海外から多数の研究者を招聘し、国際共同研究へと発展させるとともに、若手研究者、大学院学生を相互に派遣しあう体制づくりを進める(研究所として招聘・派遣を積極的に支援)。とくに、若手研究者については、海外滞在研究を積極的に行うように呼び掛け、異分野基礎科学研究所を国際的な研究ネットワークの中に位置づけるための活動を強化する。外国の研究機関との共同研究を推進する新たな予算の獲得を目指す。 ・女性研究者の積極的な採用に尽力するとともに、女性が働きやすい環境を整える。国際公募による研究者採用を進め、外国人研究者の比率を高めるとともに、各研究グループにおいて、職員、学生の中に必ず外国人(日本語を母語としない者)がいる状況を作り、英語を使った研究活動が基本となる研究体制の構築を整える。 ・研究所の予算的な基盤を確立できるように、大型プロジェクトに積極的に応募するとともに、特許等の将来の財政的基盤になりうる研究活動について研究所全体で考える。研究活動が、安全に行えるようにするとともに、環境に対しても配慮を払った研究を推進できるように、安全講習・環境啓発講習等を開催する。</p>	<p>異分野基礎科学研究所の設置理念は「基礎科学研究の深化発展と、異分野融合的研究展開による新しい学問分野の創出、国際的な視点での研究活動の積極的推進」であることを念頭に多様な取り組みを行った。 ・世界をリードする光合成研究の積極的な支援を図るとともに、超伝導、エレクトロニクス、エネルギー貯蔵物質の理論化学研究の更なる研究レベルの引き上げのため、特任教員を適切に配置し研究活動を支援してきた。また、世界オンリーワン研究を行っているニュートリノ研究ならびに数理科学研究を、研究所として組織的に支援するために特任教員の配置を行った。これによって、研究所全体の研究活動が組織的に推進されている。また、大学院学生の支援(非常勤職員雇用)を研究所として独自に行って、大学院生が研究所を構成する各研究グループに所属して、研究に専念できる体制を作っている。これは各グループの研究力アップに大きく貢献している。さらに、大学院生に対する研究助成を行って、若手の発想での研究活動を支援した。 ・トップ1%となる論文数の引き上げと、Nature, Scienceならびにそれに準ずるクラスの雑誌への掲載、被引用回数の増加(5000を目安にした被引用回数の増加)を図ることを目指した。実際に、各教員の被引用回数の着実な増加が図られている(現在5000以上の被引用回数教員は7名であるが、5000を数年以内に超えることが確実な教員が数名いる)。また、平成30年、Natureで2件の研究成果の発表がなされている(2019年初頭に1件の論文がScienceにて報告されている)。また、研究所教員の高被引用論文数は平成22年1月からの累計分のみで現在83件になっている。同時期の岡山大学全体の高被引用論文数が184件であることを考えると、研究所の研究が極めて高いレベルにあることがわかる。平成30年にインパクトファクター9.5以上の論文において、12件の研究報告が行われている。研究所全体の平成30年の報告論文数は98件であって(専任教員のみで兼任は除く)、適切な論文報告がなされているといえる。なお、論文数等については、平成30年1月から平成30年12月でカウントしている。 ・世界トップクラスの外国人教員の採用によって設置した研究グループの支援を進めてきた。平成30年8月1日付で着任したRobert C. Robinson教授の研究室の立ち上げを研究所として積極的に支援して、直ちに研究活動に入れる体制の構築に努めた。具体的には、研究を行う上で必要な機器等を研究所の予算でそろえるとともに、事務補佐員を雇用するなどの措置を行った。これによって、Robinson教授は、ヒューマンフロンティアプロジェクト予算に基づいた研究活動に直ちに入ることができた。Robinson教授は、10月3日公表のNature誌において研究成果を2名の著者で(本学が所属として記載)公表した。また、もう1人の世界トップクラス招聘教員であるHarald O. Jeschke教授の研究活動支援のために、平成29年度に雇用した1名の特任助教の他に、卓越研究員制度を利用して1名の承継教員(准教授)を配置した。これによって、Jeschke教授の研究体制がより一層強固なものとなっている。前述のRobinson教授についても、平成31年4月付で1名の特任助教を採用することになっている。海外との研究交流ネットワーク形成については、上記の世界トップクラス教員招聘が最も重要な研究所の施策であるが、これに加えて、若手を含む7名の研究者の海外派遣を行った(1名の大学院博士前期課程学生を含む)。このように、着実に国際研究ネットワーク形成(世界に開かれた研究所)の構築が進んでいる。 ・承継教員で3名、特任教員で2名の教員が女性である。女性教員の研究活動支援のためにスペースの確保や予算的な支援等を行っている。安全衛生の面については、必要に応じて研究所内に必要事項を周知するなどしている。また、外国人教員への安全衛生・講習等についても、次年度より英文によって周知することになっている。</p>
②-2 年度計画との関連	②-2 大学全体への貢献
<p>・年度計画にあるように、異分野基礎科学研究所は、海外招聘教授による研究グループの研究活動を組織的に支援する。 ・国際共同研究の積極的拡大を図るために、若手研究者や大学院生の海外派遣や、海外からの優秀な研究者の滞在研究について支援する。 ・学際基礎科学専攻に所属する博士後期課程学生の研究活動を積極的かつ組織的に支援して、新しい発想に基づく研究を異分野基礎科学研究所として成功に導く。</p>	<p>・世界トップクラスの研究成果が適切に研究所から出ており、岡山大学の研究大学としての側面に大きく貢献している。とくに、物理学ならびに生物学関係の研究業績について、岡山大学が高い評価を得ていることに貢献している。また、大学の事業として始まる「岡山大学研究拠点形成促進プログラム」による海外招聘研究者(海外PI)として研究所が提案したハーバード大学のJohn M. Doyle教授が採用されるなど、岡山大学の研究活動の国際化についても積極的に協力している。これは、「岡山大学の研究面での新たなプロジェクトを行うパイロット的な研究組織」としての異分野基礎科学研究所の立場を明確にしている。</p>

<p>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果の発表としてのトップ1%ならびに10%論文の伸び。 高いインパクトファクターを有する雑誌での研究発表数。 国際共同研究の実施状況の伸び。 外国人研究者(大学院学生を含む)の受け入れ状況の伸び(少なくとも15名以上を招聘)。 外国研究機関での研究活動のための滞在者(長期・短期)数を増加させる(少なくとも7名以上を研究所として派遣する)。 被引用回数の増加(5000以上の被引用回数を有する研究者数を増加させる)。 国内外における研究に関する受賞者数を増加させる(国内トップの賞等の受賞者を輩出する)。 科研費や競争的資金の伸びを指標とする。 	<p>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</p> <ul style="list-style-type: none"> 高被引用論文(トップ1%)論文が、平成22年からの累計で83件となっている。岡山大学の同時期の高被引用論文数184件のうちの45%を異分野基礎科学研究所教員の論文が占めていることを意味し、岡山大学の研究ランキング向上に大きく貢献している。 インパクトファクター9.5以上の論文数は平成30年は12件であって、29年の9件より増加している。また、高インパクトファクター論文誌での掲載論文数は、高水準の状況を維持している。 外国人研究者(大学院学生を含む)の受け入れについては平成30年度(12月末段階)で32名であり、当初目標を達成した。 長期・短期の海外研究機関への研究を目的とした研究者派遣数は7名であって目標数を達成している。 主な研究に関する受賞は、秋光特任教授が平成31年4月付で、第23回超伝導科学技術賞特別賞を受賞するのを始めとして、各種の国際会議等で若手研究者が受賞している。 科研費については、新規採択率26.9%と自然科学系の他部局と比べて高い水準を維持している
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p>	
<p>③-1 目標</p> <p>国内外ならびに地域において実践すべき社会活動に積極的に取り組む。たとえば、研究上の活動(学会等)における役員等の数の増加、各種の専門雑誌等における編集委員やAdvisory Boardメンバー等を増加させることによって、研究者コミュニティにおいて異分野基礎科学研究所の存在感を増加させる。また、国際組織、国、地方組織における各種専門家会議のメンバーを増加させることが必要である。さらに、国際会議等を海外で実施するなど、積極的に海外での活動を推進し進める。各種企業ならびに地域の中小企業等の技術相談に積極的に応じるとともに、必要に応じて、中小企業等からの研修を受け入れるなどについて組織として検討する。また、海外の大学や研究機関との交流協定数を増加させ、国際共同研究遂行の体制を強化する。</p>	<p>③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</p> <p>国内外ならびに地域において実践すべき社会活動に積極的に取り組むようにしてきた。とくに、研究上の活動(学会等)における役員等の数の増加、専門雑誌等における編集委員やAdvisory Boardメンバー等を増加させることによって、研究者コミュニティにおいて異分野基礎科学研究所の存在感を増加させることを目指してきた。平成30年度も海外で開催された国際会議のセッション副オガナイザーや、SPRING-8を始めとする大型共同利用施設などの課題選定委員等を輩出している。また、沈教授の優れた研究に対して、国大協の機関紙でのインタビューを受けるとともに(研究所についても紹介された)、研究所の教員が、文部科学省から将来の研究プロジェクトに関する諮問のための訪問等を受けている。今後、さらに国・地方自治体等の審議委員になる教員を増加させなければいけない。</p>
<p>③-2 年度計画との関連</p> <p>研究所の研究活動を発展させる観点と、社会に対して研究所の研究成果を還元させる(SDGsにおける活動など)ことを目指して、社会の各分野と積極的な交流を持つとともに、国際的にも、研究者のネットワークの中心として活動することを目指す。</p>	<p>③-2 大学全体への貢献</p> <p>研究所の研究活動を発展させる観点と、社会に対して研究所の研究成果を還元させること(SDGsにおける活動など)について、研究所教員に積極的に周知している。SDGsについては研究所から複数の提案を行っており、このための研究活動を積極的に支援する特任教員配置を行っている。</p>
<p>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開講座や公開シンポジウム等の実施による研究への理解の増進。 各種の研究者コミュニティの中での審査委員や評価委員数の増加。 各レベルの機関(国際、国、地方)における審議会等の委員数の増加。 国際交流協定数の増加。 国際会議の主催。 	<p>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成30年度、異分野基礎科学研究所の公開講座を実施した。平成31年度も実施することを決定している。 山陽放送ラジオでの異分野基礎科学研究所の研究活動の紹介を2週にわたって行った(番組名:技術の森)。 国際交流協定を平成30年度新たにカナダのサスカチュワン大学と締結した(これによって、研究所発足以降3年間で研究所が関係した協定は、大学間協定3件、部局間協定5件となった)。 国際会議については、研究所教員が主催ないし組織委員となっているものが毎年数件ある。平成30年度はE-MRS-Fall meetingのセッション副オガナイザーなどを輩出している。
<p>④管理運営領域</p>	
<p>④-1 目標</p> <p>異分野基礎科学研究所の設置理念を構成員全体が理解し、その実現に向けて協力する体制づくりを行う。その目的のために以下に記載の内容を実践する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 所長―副所長―コア長による調整会議と、研究所教授会による運営体制を維持しながら、各研究グループの希望を細やかに把握する体制の構築を目指す。 各研究グループ、さらには構成員全員が研究に打ち込める体制づくりを進める。個人の考えを尊重しながら、研究所の理念を全員で実現するという体制を構築する。とくに、各自の研究活動の発展こそが、研究所の発展の基礎であるということを常に意識して運営を行う。 研究所の中で、女性教員や外国人教員が安心して研究活動を推進できる体制を作り、女性教員数や外国人教員数を増加させていく。そのため、日常的に個人やグループの希望に耳を傾ける体制を作る。 研究活動を効率的に遂行できるように、研究活動の状況を把握して、投資すべき研究は何かを考えて、傾斜配分での予算配分を進める。年俸制教員数の増加を図る。その一方、長時間かける必要のある研究についても予算の適切な配分を行う。 安全衛生部を始めとする学内の諸組織の指導を仰ぎつつ、安全かつ、環境に配慮した研究活動を実施する。また、事務職員の事務活動が効率的に執行できるように研究所として適切にフォローしていく。 研究活動を強化するために必要な設備を把握し、研究グループ単位で持つことが難しい装置については、研究所として共用装置としてサポートする。そのための大型予算等の確保に取り組む。 法令遵守の徹底について: コンプライアンス教育を推進し、法令順守のもとで研究活動を行う。また、問題が生じる要因がないかをオープンな議論の中でみていく。また、研究グループ間の垣根を低くして、若手研究者や学生にとって「研究活動が行い易い環境であるか」を常に組織の問題として考える。 	<p>④-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</p> <p>異分野基礎科学研究所の設置理念を構成員全体が理解し、その実現に向けて協力する体制づくりを一環として行っている。すべての構成員への重要事項の周知、構成員の意見を集約するように、コア長会議・教授会以外に必要に応じて研究グループからの出席を求めた会議を行っている。以下に具体的な取り組みと達成状況を示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 所長―副所長―コア長による調整会議と、研究所教授会による運営体制を維持しながら、各研究グループの希望を細やかに把握する体制として、各グループからの出席による会議を設けている(現在は、とくに新棟の設計等のためのグループ代表者会議を行っている)。 各研究グループ、さらには構成員全員が研究に打ち込める体制づくりを進める。このために、研究所が「研究を第一とする組織である」ことを、構成員に周知しており、構成員から研究遂行のために必要な要請等があれば、積極的に支援するなど迅速な対応を行っている(たとえば、海外滞在学习の支援等の要請、スペースの維持に関する要請等)。日常的に個人やグループの希望に耳を傾ける体制を作るように心がけており、グループ、コアからの声は直接、研究所の執行部に届くようにしている(グループ代表者に周知している)。 研究活動を効率的に遂行できるように、研究活動の状況を把握して、今後とくに支援すべき研究は何かを考えるため、構成員の声だけではなく、外部の声を聞く必要がある。そこで、平成30年度は外部評価を実施した(外部評価者は、分子科学研究所長、高エネルギー加速器研究機構理事、日本数学会理事長など有識者6名)。評価結果は現在取りまとめ中である。 安全衛生部を始めとする学内の諸組織の指導を仰ぎつつ、安全かつ、環境に配慮した研究活動を実施する。常時、安全衛生部教員との連携を密にとり、安全な研究遂行環境の形成に努めている。非常勤の事務補佐などの労働条件などに気を配っており、必要に応じて意見集約を行っている。 研究活動を行うにあたって必要な「新総合研究棟」については、岡山大学の支援によって、平成30年度に文部科学省に認められた。これによって、研究活動がなお一層進むことになる。 コンプライアンス教育を推進し、法令順守のもとで研究活動を行うために、倫理教育や情報セキュリティe-learningの徹底を呼び掛けている(受講率の発表後、直ちに構成員に周知するなどにも努めている)。
<p>④-2 年度計画との関連</p> <p>研究活動が行いやすいように、また、学際基礎科学専攻の大学院教育が適切に発展するように、研究所の管理運営を行っていく。各グループ、個人の意見を吸い上げる研究所運営を行う。</p>	<p>④-2 大学全体への貢献</p> <p>管理運営に当たっては、常に構成員の力を発揮して、大学の発展に貢献するように心がけている。今年度は、外部評価を実施することによって、客観的な視点で、組織を見直すようにしており、これは大学改革に貢献するものと考えられる。また、研究所は、岡山大学の研究改革を先頭で担う組織であることが、全構成員に徹底することから、次世代の大学に向けての意識改革は進んでいると考える。とくに、小回りの利く組織であることを通じて、大学の方針が構成員と共有できる良い形態が形成されている。これは大学改革に向けて、「小さな組織から全体へ」という観点で重要であると考えられる。</p>
<p>④-3 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 女性教員数の増加と外国人教員数の増加 年俸制教員数の増加 法令順守活動の推進 平成30年度外部評価を実施する。 研究活動がやりやすい環境であるか(とくに、女性・若手研究者、学生にとって)についての聞き取りの実施。 	<p>④-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</p> <ul style="list-style-type: none"> 2つ目の世界トップクラス招聘外国人教員の研究グループが立ち上がった。また、大学の事業としての海外PIに研究所の提案が受け入れられたため、ハーバード大学の教員との共同研究を開始できる。 年俸制教員数の増加については、1名の新任の承継教員が年俸制となった。 法令順守活動の推進については、法令順守のための活動(e-learningの周知など)を行っている。 6名の外部評価委員による外部評価を実施中である。 研究活動がやりやすい環境であるかについては、新棟設計と合わせて各グループの意見を聞いている。

【総括記述欄】

異分野基礎科学研究所は、岡山大学における第3期中期目標計画に沿って、「岡山大学の研究力強化」を正面で支えるパイロット的な組織であることを念頭に、組織運営を行わなければならない。それによって、構成員の意識が、「大学改革の一環として研究力強化を先頭で担っている」というように向いていく必要がある。現在、研究所教員は研究と教育に専念することによって、個々の研究成果をあげていくことに集中しており、これによって世界に伍する研究成果が出ている。これを世界トップレベルへと発展させるとともに、岡山大学全体の研究レベルをあげていくようにマネジメントしていくことが問われている。第3期中期目標期間の残り3年をそのような組織運営ができるようにしていかなければならない。